



岸蔭貴裕 医師

早期の腎臓がん治療の主流となつている部分切除。山梨県立中央病院は手術支援ロボット「ダヴィンチ」を使ってこの手術を進めていて、過去5年でがんが再発した患者は

いる。

岸蔭医師によると、腎臓がんは初期の頃はほぼ無症状のため、進行してから見つかる例が以前は多かった。画像診断技術の進歩などで早期に見つけやすくなり、腎臓の機能

維持を目的に部分切除するケースが増えている。

同院のデータを見ると、2018年度以降、腎臓がんの部分切除は69件実施し、9割近く(62件)をロボットが占めている。患者の状況に応じ

だという。

一方、「部分切除でがんの取り残しがあれば再発が考えられる」と岸蔭医師。がんができた腎臓を摘出する「全摘」に比べて必ずしもリスクが高くなるわけではないが、患者

なった。手術中に部分切除から全摘に切り替える際、そのままロボットを活用できるようになった。同院でそうしたケースは起きていないが、いつでも対応できるように準備は進めているという。

ロボットを活用した手術が国内でスタートしたのは12年。当初は泌尿器科領域の前立腺がんの摘出手術のみだった。10年以上が経過し、今では同領域の腹部手術のほとんどをロボットで対応できるようになった。

早期腎臓がんを部分切除

正確な手術再発ゼロに

て開腹で行ったこともあるが、ロボットと同様に体への負担が少ない腹腔鏡はすでに

に事前に説明している重要なポイントだ。実際に同院の実績を見ると、18年度以降の患者で再発は1例も確認されていない。

岸蔭医師は「想定外のこと」が起きた際に対応できる専門医がいることが前提」と前置きした上で続ける。「ロボットに自動化する機能が追加されれば、技術の高度化、均一化がさらに進む。もはや『神の手』は必要ないのかもしれない」



者の負担軽減につながるため出血もさらに少なくなり、患者の負担軽減につながるため

22年4月には腎臓の全摘もロボットの活用が保険適用と

第2、4木曜日に掲載します。